

セイタカアワダチソウ (*Solidago altissima* L.) の日本における分布

中 川 恭 二 郎 ・ 榎 本 敬

セイタカアワダチソウを含むアキノキリンソウ属 (*Solidago* 属) には約 125 種が認められその大部分は北アメリカに分布し、ヨーロッパや南アメリカには 2~3 種よりなかった (Britton and Brown 1913). これまでに日本では次の 8 種の生育が認められている (大井 1972, 北村ら 1958, 長田 1972).

<i>Solidago</i> (goldenrod)	アキノキリンソウ属
<i>S. altissima</i> L.	セイタカアワダチソウ
<i>S. gigantea</i> var. <i>leiophylla</i> Fern.	オオアワダチソウ
<i>S. canadensis</i> L.	カナダアキノキリンソウ
<i>S. sempervirens</i> L.	トキワアワダチソウ
<i>S. virgaurea</i> L.	
subsp. <i>asiatica</i> Kitamura	アキノキリンソウ
subsp. <i>leiocarpa</i> Hult.	コガネギク
subsp. <i>gigantea</i> Kitamura	オオコガネギク
subsp. <i>linearifolia</i> Mak. (<i>S. yokusaiana</i>)	アオヤギバナ

これらのうち日本各地に急速に分布が広がっているのはセイタカアワダチソウである。本種は開花期が 10 月中旬以降 11 月までで、他種よりおそく、草丈が高くて 2~3 m にも達し、葉の両面に毛があって粗造であることなどで他種と区別できる。明治 30 年に日本に入ったとの記録はあるが、一般に分布がひろがったのは第 2 次世界大戦後のことで、進駐軍の物資など米国から入った輸入品に附随して伝播したと考えられる。西日本にとくに多く分布し、しかも都市の近郊において他の草本植物を圧倒して単一群落を形成して目立ち、開花期になると話題になることが多い。年々その分布範囲が拡大する傾向があり、その防除が重要になる可能性がある。そこで 1971 年に日本全国の国立および都府県立の農業試験場の雑草研究担当者および植物研究者の協力を得て、分布状態を調査するとともに、われわれ自身で各地の実態を調査した。未調査の地域もあり、場所によって調査に精粗があり未だ必ずしも十分ではないが、これまでの結果をとりまとめて報告することにした。

本調査の実施に当っては、前記の全国各地の雑草研究者、植物研究者だけでなく、農業改良普及員にも協力戴いた府県も多い。また調査の実施およびとりまとめには兵庫県農業試験場の山根国男、矢野晴美両氏、岡山大学農業生物研究所の田村真理子氏の援助を得た。協力戴いた諸氏に深く感謝する。

調 査 方 法

1. 日本全国の分布（アンケート調査）

1971 年秋、セイタカアワダチソウの開花期に、全国の都府県立農業試験場および国立北海道農業試験場の雑草防除研究担当者に調査表を配布し、現在セイタカアワダチソウが分布している郡市名、生育地および群落状態、県内への侵入年とセイタカアワダチソウ群落に代る前の群落構成種などの調査を依頼した。生育地は次の 18 に区分した。

1 森	林	7 普 通	畑	13 道 路	わ き
2 林	縁	8 水	田	14 鉄道線路	ぞい
3 樹 園	地	9 畑 の	周 辺	15 住 宅 の	周 辺
4 放 棄	田	10 用 水	路 ぞい	16 工 場	敷 地
5 放 棄	畑	11 河 川 の	堤 防	17 新 規	造成 地
6 休 耕	田	12 河	原	18 海	岸

群落状態は下記の 4 区分とした。

- A. ほとんどセイタカアワダチソウのみの群落になっている。
- B. 他種と混生しているがかなり多く見かけられる。
- C. まれに生育している。
- D. まったく見かけない。

2. 現 地 調 査

アンケート調査では調査者の主観が入ることは避けられない。とくに群落状態の区分に明確な基準を設定することが困難であり、調査者による基準のくい違いを修正する必要がある。そのため筆者らは 1971 年より 3 年間鉄道や自動車を利用して、できるだけ多くの地方を回り、主として車窓から沿線の分布状況を調査し、全国を一つの基準によって比較できるようにつとめた。しかし北海道、東北、関東東部、九州南部などの状況の把握は不十分であった。

アンケートによる全国分布調査の結果、兵庫県下では南部の市街化地域だけでなく、山間部にもかなり多く分布していることが明らかになったので、1973 年 11 月に、兵庫県立農業試験場との共同で、兵庫県内の主な道路と鉄道の沿線の分布を調査した。

調 査 結 果

1. 生育地と群落形成状態

調査票によって調査が行なわれたのは 32 都道府県であった。調査票を送付したのが 11 月であり、東北や山陰などの分布が少ない一部の県では調査が困難であったため、調査票には記入されず、あとで侵入していることが報告された県もある。

生育地別の分布状態を A, B, C, D の 4 区分するだけでなく、A と B, B と C のように 2 階級にまたがる表示をされたものがあったので、それらを 2 階級の中間と評価し、全体を、A を 6, D を 0 とした 7 階級の評点に読み替えて都道府県別 および 生育地別に集計した。全地域を対象に市町村別に調査された都道府県と一部の地域を抽出調査されたとこ

ろとが混在しており、評価の基準も必ずしも同一ではないため、各都道府県の調査結果を均一な比重で集計した結果は実態を正確に示したものとはいえない、しかし実地調査の結果と照合してみても、それがほぼ正しい傾向を示していることを確認した。

セイタカアワダチソウが分布していた都府県の調査表によって、都府県別に18区分の生育地のうち侵入が認められた生育地種類数、各生育地の分布状態の評点の合計、評点の合計を生育地数で除した平均評点を第1表に示した。生育地数が小さい宮城では住宅の周辺だけに、山梨では畑の周辺にだけ見出されており、群馬では用水路ぞいと河原、鉄道線路ぞいに、静岡では畑の周辺と道路わき、住宅の周辺に侵入している。生育地数が多くなるにしたがって各所に見出されるようになり、兵庫では全生育地に、大分では水田を除い

第1表 都府県別セイタカアワダチソウ分布程度

都府県名	生育地種類数	評点合計	平均評点	都府県名	生育地種類数	評点合計	平均評点
秋田	7	14	2.00	奈良	16	57	3.80
新潟	9	30	3.33	和歌山	15	33	2.36
福島	6	12	2.00	兵庫	17	44	2.56
群馬	3	10	3.33	岡山	13	37	2.80
茨城	15	50	3.33	広島	12	33	2.75
千葉	15	55	3.67	山口	12	42	3.50
東京	5	14	2.80	鳥根	2	4	2.00
神奈川	8	20	2.50	香川	6	32	5.33
山梨	1	2	2.00	徳島	3	6	2.00
静岡	3	8	2.67	愛媛	7	16	2.29
愛知	13	28	2.15	大分	17	52	3.06
岐阜	9	20	2.22	福岡	16	58	3.63
三重	14	39	2.79	佐賀	16	46	2.88
滋賀	13	39	3.00	長崎	10	20	2.00
京都	14	53	4.08	宮崎	6	12	2.00
大阪	16	67	4.47	鹿児島	6	20	3.33

て、大阪では水田と森林を除いて、奈良と福岡では水田と普通田を除いて、佐賀では水田と休耕田を除いて、その他の全生育地に侵入している。

各都府県の群落形成程度の評点を生育地別に集計した結果を第2表に示した。河川の堤防と鉄道線路ぞいには大きな群落になっていない評点2と他種と混生しながらもかなり多く見かける評点4とがとくに多く、調査された多くの都府県に分布している。道路わきと住宅の周辺、畑の周辺にも多くの都府県で見かけられているが、大きな群落になっていないことが多い点で前者と異なっている。畑の周辺ではその傾向がとくに強く70.8%は評点2に属する。河原と工場敷地とでは各評点に分散しており、工場敷地ではセイタカアワダチソウだけの単一群落が存在するところが滋賀、京都、大阪、広島、の4県で認められている。用水路ぞいでは大きな群落は少ない傾向があり、新規造成地、放棄田、放棄畑では分布が認められた都府県数が20以下とかなり少なくなっている。林縁では分布都府県数

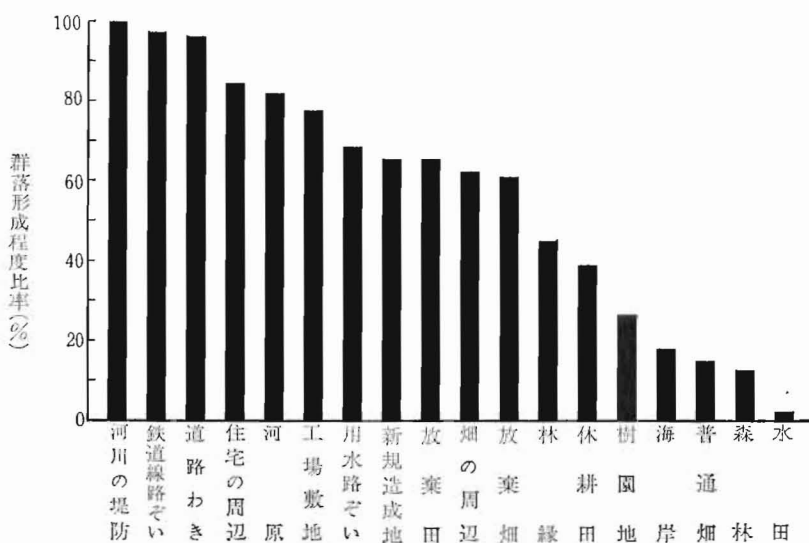
が14とさらに少なくなり、その約半分が評点2であった。休耕田は評点1が3都府県、2が8都府県で全体の73.3%も占めていたが、評点6も福岡県で認められている。樹園地・普通畑・森林・海岸では分布している都府県数も少なく、まとまった群落にはなっていない。水田には兵庫県の山間地1町村だけで認められているが、水利の悪い乾田状態のところであろう。

第2表に示した生育地別の群落形成程度の評点にその評点に相当する群落状態と記載した都府県数を乗じて全国の合計値を出し、その値が最も大きかった河川の堤防を100%と

第2表 生育地別の群落状態

生 育 地	群落形成程度の評点別都府県数						計
	1	2	3	4	5	6	
河川の堤防	0	7	2	12	3	2	26
鉄道線路ぞい	0	9	5	8	3	2	27
道路わき	0	14	4	3	3	4	28
住宅の周辺	0	19	2	4	1	2	28
河原	1	9	5	6	4	0	25
工場敷地	1	7	6	3	1	4	22
用水路ぞい	1	10	3	5	3	0	22
新規造成地	1	8	0	6	3	1	19
放棄田	0	7	4	6	0	2	19
畑の周辺	0	17	3	4	0	0	24
放棄畑	0	4	3	6	1	2	16
林縁	0	7	4	3	1	0	14
休耕田	3	8	1	1	1	1	15
樹園地	0	8	3	0	0	0	11
普通畑	2	6	0	0	0	0	8
海岸	0	5	1	1	0	0	7
森林	0	3	2	0	0	0	5
水田	0	1	0	0	0	0	1

したときのその他の生育地の比率を算出して図示したのが第1図である。したがって第1図は各生育地にセイタカアワダチソウが定着する機会の多少とそこで形成する群落の大きさの程度を総合して表現したものである。鉄道線路ぞいと道路わきは河川の堤防と同程度に大きく、セイタカアワダチソウの群落がもっとも形成されやすいところである。住宅の周辺や工場敷地は人為が入る程度により、また河原は川の状態により群落の形成程度が異なり、河川の堤防などよりやや低い値を示している。用水路ぞい、新規造成地、放棄田、放棄畑、畑の周辺では条件によって群落程度が抑制される程度がより大きく、前者より比率がさらに小さくなる。山林の影響がある林縁、土壌が多湿なことが多く放棄後の年数が短い休耕田、管理作業がよく行なわれる樹園地や普通畑などでは群落形成程度比率が低下する。海岸や森林では比率がさらに低く、自然環境がセイタカアワダチソウに適さないようである。



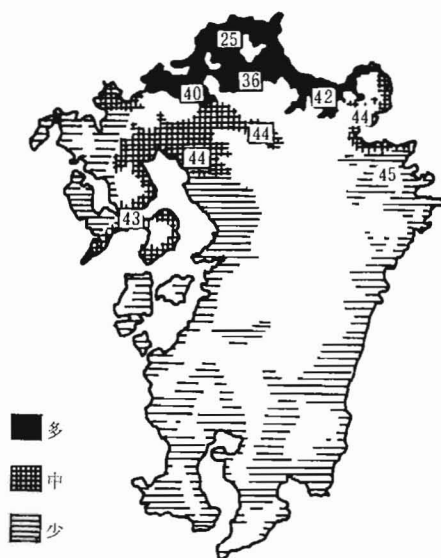
第1図 群落形成状態の生育地による差異

—各都府県別群落形成状態評点の生育地別合計値の河川の堤防に対する比率—

2. 分布と侵入時期

北九州の八幡附近には昭和25、26年頃侵入し、次第に南の方にひろがっている。福岡県では昭和36年ごろには行橋、飯塚、福岡で、40年ごろには、甘木で、筑後では43年ごろから見かけられるようになっている。大分県では昭和42～43年ごろ、福岡県と隣接した中津市でわずかに見られる程度であったのが、44年には別府市や大分市までひろがり、筑後川上流の日田市でも見られている。46年には標高450m以下の地帯では全県下に分布するようになっている。佐賀県の平野部でも長崎本線沿いに濃密に分布するようになり、山間地を除いて諫早市や長崎市でも認められているが、ここでは大きな群落にはなっていない。鹿児島県や宮崎県でもかなり広い地域に分布しているが、セイタカアワダチソウの単一群落になっているところはない。九州における分布地域とひろがっていった年代を第2図に示した。

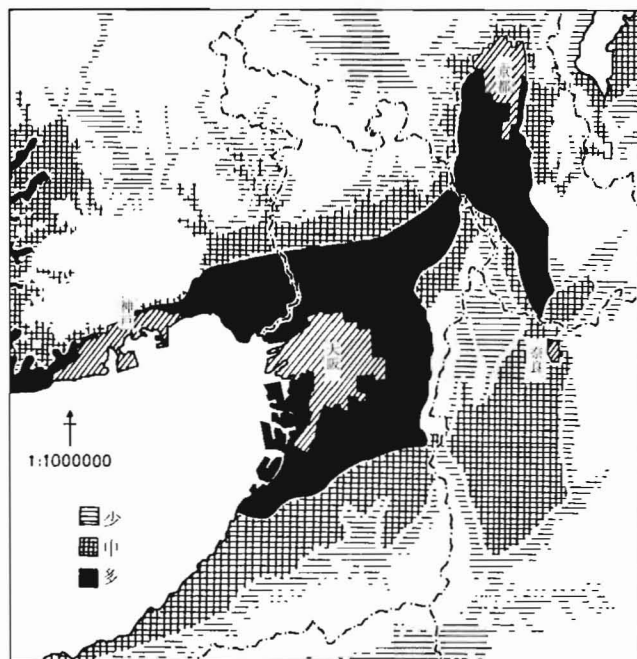
中国地方では中国山脈の山地が海岸まで迫っているところが多く、セイタカアワダチソウの分布が多いのは瀬戸内海沿岸の都市部に限られている。山口県では下関市や工場地帯である小野田市、宇部市など北九州の対岸から柳井市、岩国市まで瀬戸内海



第2図 九州地方におけるセイタカアワダチソウの分布

沿岸の全市とその間の市町村に分布している。この瀬戸内海沿岸の分布域は広島、岡山両県につながり福山市や岡山港などで大きな単一群落が見られる。山間部では国道の沿線でまれに見られる程度である。山陰では出雲市、松江市付近や鳥取市の周辺の鉄道線路ぞいや河川の堤防などでまれにやや大きな群落が見られる。兵庫県豊岡市の河川敷と堤防にセイタカアワダチソウだけの大きな群落があった。

四国地方では、香川県と愛媛県の全域に分布し、香川県では単一群落になっているところもある。徳島県では道路ぞいに点在している程度である。



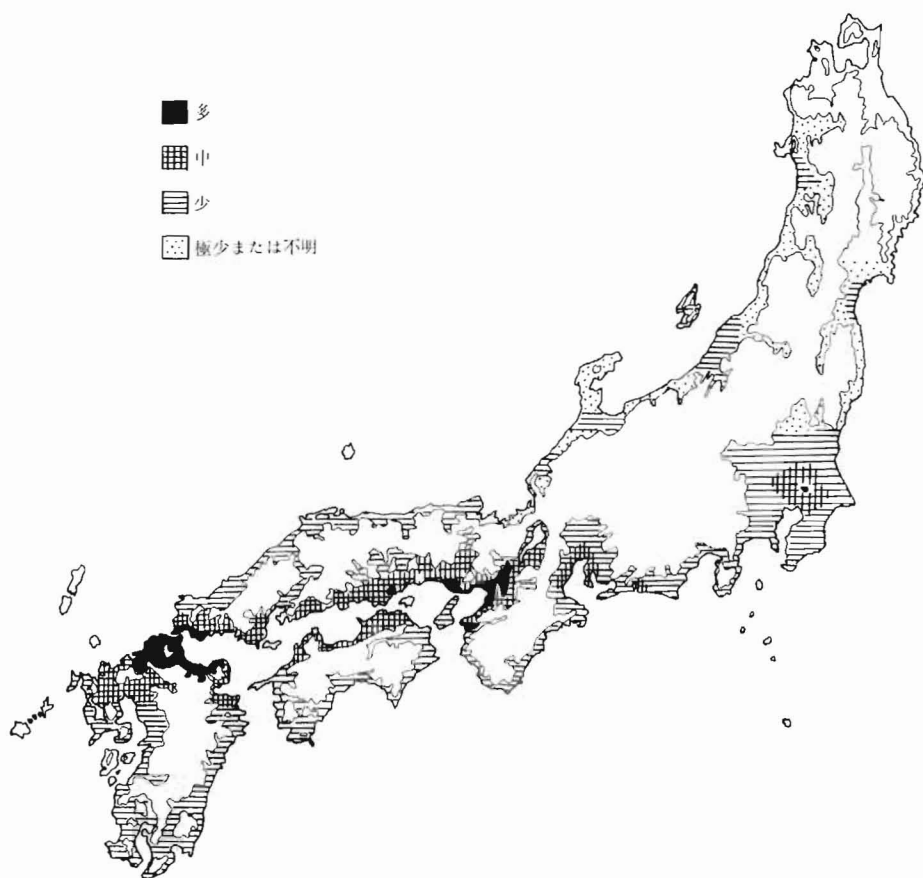
第3図 京阪神地域におけるセイタカアワダチソウの分布

北九州とともに濃密に分布しているのが京阪神地域である。山陽線を東に向うと兵庫県に入ってすぐ上郡駅付近から点在しているのが見られ、姫路市の周辺でまとまった群落が存在するようになる。姫路市をはずれるといったん減少するが、明石市の西、魚住付近から密生地が多くなる。新規に造成された宅地などがセイタカアワダチソウの単一群落で占められている。それから大阪府、京都府を通り滋賀県南部までは鉄道の沿線、道路ぞいのいたるところの空地、造成地、休耕田や休耕畑などがセイタカアワダチソウの大きな群落で占められている。第3図に示したように大阪府では府下全域に分布するが、平たん地の池田、豊中、吹田、茨木、枚方、大東、東大阪、八尾、羽曳野、松原、堺、泉大津などの各市部にとくに多い。京都府では京都市以南の平たん地、京都、宇治両市と乙訓、久世、綴喜、相楽の各郡にとくに多い。京阪神地方でセイタカアワダチソウの侵入が目立つようになったのは昭和36年頃からであるが、中井(1949)は淀川堤防等にあることを報じており、北九州に侵入したのと同じ頃京阪神地方にも入ったようである。

東海地方では愛知県の名古屋市、愛知郡、知多郡に多いが、岐阜県や静岡県では市街地

付近で他種と混生している群落は見られるが、そのほかではまれに点在している程度である。名古屋付近では昭和43年頃から目につくようになっていく。

茨城県では各農業改良普及所の協力を得て全県下にわたって調査が行なわれ、県南の霞ヶ浦以西の全市町村に分布していることが確かめられた。古河、取手、竜ヶ崎、水海道、土浦、石岡の各市と猿島郡、北相馬郡、稲敷郡、筑波郡の全域および新治郡の桜、新治、千代田、玉里の各村に分布していた。利根川および国道6号線にそった市町村が多い。千葉県北部と利根川を隔てて隣接した北相馬郡守谷町にとくに濃密に分布している。この茨城県南部の分布域は千葉県北部と埼玉県南部の分布域につながっている。昭和47年には茨城県の石岡市や水戸市、埼玉県の熊谷市付近でも目立つようになっていく。群馬県では昭和46年12月に相生市、佐波郡境町、前橋市、高崎市、沼田市で確認されており、はじめて侵入したのは昭和40年頃とされている。



第4図 本州・四国・九州におけるセイタカアワダチソウの分布

東北地方では、宮城県で仙台市周辺と県南海岸地帯に家庭に栽植したのが逸出したとみられるものが若干あり、秋田市内でも栽植されているものが認められている。秋田県では秋田市、大曲市、花輪町に分布している。北海道に分布しているのは主としてオオアワダチソウで、セイタカアワダチソウの侵入は明らかでない。青森県や岩手県にもほとんど侵

入していないのではないかとみられる。

北陸では新潟県の新潟市、南蒲原郡、長岡市、北魚沼郡、南魚沼郡で確認されており、宅地、工場用地などの埋立地ではセイタカアワダチソウだけの群落に近い状態になっているところがある。富山、石川、福井各県では市街地の周辺で一部にかなり密生しているところは見られるが、全般に広く分布しているところはない。

セイタカアワダチソウは近畿以西の平たん地全域に分布しており、北九州や京阪神には本種だけの大きい群落が多い濃密分布地帯がある。東海以東での分布はそれより少なく、茨城南西部周辺にまとまった分布地帯があるだけである。本種の分布と気温との関係は未だ明らかでないが、現在の分布は気象条件よりも人間の生活との間に密接な関係がありそうである。セイタカアワダチソウが多い生育地は鉄道線路ぞいや道路わきであり、また住宅の周辺や工場敷地などであり、交通が発達しているところ、人間の生活圏の周辺に多く分布している。森林の中にはほとんど入らず山間地にも少ない。多くの地方では標高 200m 以上は山間地となっているので、セイタカアワダチソウの分布域も標高 200m 以下として図示したのが第 4 図である。しかし大分県では標高 450m までの土地に分布が認められ、中国地方の山間の国道ぞいでは標高 400m でも生育しており、今後の調査で標高 200m 以上の地帯の分布が増加する可能性はある。一方標高 200m 以下の地帯で未調査のため分布が確認されていない地帯も多いが、関東南部以西ではその周囲の分布状態からみて侵入している可能性があり、少程度の分布域と同じに扱った。しかし関東の北隅から東北南部と北陸の一部はその周囲の分布地帯でもわずかに侵入している程度であり、分布不明とした。岩手県、青森県、北海道では分布が認められていない。

考 察

1. 生 育 地

セイタカアワダチソウは広い範囲の土壌条件に適応するようである。乾燥した土地にも湿潤な土地にも定着している。しかし湛水した水田には認められない。また山土で盛土された造成地、市街地の中の空地のような養分の少ない土地でも盛んに生育している。現在多く分布している生育地は鉄道線路ぞい、道路わきなど交通の頻繁なところ、住宅の周辺や工場敷地など人間の生活圏の周囲、あるいは河川の堤防や河原である。河川の堤防や河原も上流には稀で、多くは市街地や橋梁付近に多く、人間の生活と関係が深い。セイタカアワダチソウの花は鮮明な黄色であり、他の草花が少ない 10 月後半から 11 月にかけて開花するので、住宅の庭園に栽植されたことが多い。東北地方や山間で点在しているものにそこから逸出した場合があるようである。

現在研究中であるが、種子から育ったセイタカアワダチソウ幼植物の生育は遅い。したがって野草の群落中では競争に負け、また人手が入りたびたび除草される土地では初期生育が早い他の草種に抑制されて定着しにくいようである。しかしわずかでも空地があつて、そこに定着すると 2 年目からは秋に地下茎の先端に育ったロゼットからの生育が早く他の植物を抑えて次第にひろがり、大きな単一群落を形成するようになると考えられる。草丈が 2~3 m にもなるので、セイタカアワダチソウの群落内では他の草木植物は日陰となり生育できない。セイタカアワダチソウが出す分泌物が他の植物の生育を抑制するアレロパシー（他感作用）も認められているが、群落構造にどの程度影響するかは未だ明らか

でない。比較的人手が入らない工場敷地、道路わき、鉄道線路ぞい、河川の堤防などに単一群落が認められるのは以上のようなセイタカアワダチソウの特性によるのであろう。たえず管理が行なわれている樹園地や普通畑には定着しにくいし、侵入しても大きな群落にはなれず、他の草種の中にまれに生育している程度である。畑の周辺も人手が入るところであり、大きな群落は少ない。休耕田にはかなり生育している。アンケートによる分布調査を行なったのは水田の休耕制度が始まって2年目の秋であるが、セイタカアワダチソウの単一群落が認められた県さえあった。放棄田や放棄畑については、放棄されてからの年数は不明であるが、種々の段階の群落がある。休耕直後にセイタカアワダチソウが定着した場合には短期間でセイタカアワダチソウの単一群落が形成されるであろうが、休耕後年数がたつて他の草種が密生してしまった群落には侵入することが少なく、また侵入しても大きな群落になるまでには年数がかかるであろう。新規造成地においても同様な現象が起こればと考えられる。セイタカアワダチソウが散在するところは、最近造成されたか、他の草種が密生したあとに侵入したかいずれかであろうし、大きな群落になっているところは定着後ある程度年数がたっているか、他の植物が生育していない土地に定着した場合であろう。

セイタカアワダチソウは森林や自然草地には侵入せず、人間の手が入りしかも放任されている土地で盛んに繁殖する植物であると考えられる。

2. 分 布

セイタカアワダチソウは北米原産であり、カナダの南部から米国南部のフロリダ、テキサス州にわたって、西はアリゾナ、ニューメキシコにまで分布している。セイタカアワダチソウはカナダアキノキリンソウとよく似た植物であり、北米における両者の分布域もほぼ同じでカナダからフロリダまで、ロッキー山脈の東側の北アメリカ大陸の広大な地域にわたっている(福田 1971, Britton and Brown 1913)。したがって気温に対する適応性は非常に広く、わが国の北海道において、また本州や九州の高冷地においても生育するはずである。しかし現在は北海道や東北の北部には認められず、また本州や九州の標高の高い山間にはごく局部的に散在しているだけである。今後これらの地帯にも次第にひろがる可能性がある。なお、わが国ではカナダアキノキリンソウが野生化しているところはまれであり、セイタカアワダチソウだけが広く分布している。島野(1973)はセイタカアワダチソウの体細胞染色体数が54で、6倍体であることが適応力が強大である原因ではないかとしている。

定着したセイタカアワダチソウは地下茎によって増殖して次第に大きな群落になるが、新しい土地に定着するときは主として種子によると考えられる。種子には冠毛があり、1株の種子着粒数は5万粒にも及び(長田ら, 1967)、稔実率は群落の大きさ、開花時期によって変動するが、発芽率はかなり高い(島野 1973)。したがって遠くまで飛散した多くの種子が発芽して定着し、各所に新しい群落を形成する可能性がある。風によって運ばれるだけでなく、各種の交通機関によって運ばれるため、鉄道や道路の沿線に多いのであり、遠隔地に点在することもあると考えられる。セイタカアワダチソウの分布をひろげた原因に、養蜂業者が蜜源として栽植したことがあげられているが、全国的に分布がひろがっている原因は風や交通機関による伝播が主であろう。新しい土地で発芽したものの多

くが成植物になれば、セイタカアワダチソウの分布のひろがり、群落形成はこれまでよりはるかに早く進行していたはずである。それを阻害したのは発芽に対する環境条件が悪くて、野外における種子の発芽率はあまり高くないうえに、幼植物時代に他の植物との競争に負けて死滅するものが多いためではないかと考えられる。これらの点を解明しなければ、今後の分布のひろがりについて見通すことはできない。

現在のわが国における分布は第4図に示したとおりであるが、分布の程度別に分けるとつぎのとおりである。

- a. 無——将来侵入する可能性はあるが、現在までは認められていない地域。
北海道と東北北部（青森県、岩手県）。
- b. 極少——ごく一部に分布している。庭に植付けられている程度で、今後自然に分布が拡大するかどうかは不明である。
東北の南部・西部（秋田、山形、宮城、福島各県）、東山（長野県、山梨県）。
- c. 少——現在一部に分布しているが、大きな群落は少ない。今後徐々に増加する可能性が大きい。
北陸（新潟、富山、石川、福井各県）、関東北部（群馬県、栃木県、茨城県北部）、四国南部（徳島・高知両県）。
- d. 中——局所的には群落を形成しているが、全域にはひろがっていない。今後急速に増加する可能性がある。
関東西部（東京都と神奈川県）、東海の一部（静岡県、岐阜県）、山陰（京都北部、兵庫北部、鳥取、島根、山口県北部）、九州南部（熊本、宮崎、鹿児島）。
- e. 多——群落を形成しているところはかなり多いが、これまでは未だ全域にひろがっていない。
関東中東部（埼玉、茨城南部、千葉）、東海の一部（愛知、三重）、近畿中南部（滋賀、奈良、和歌山）、瀬戸内沿岸（岡山、広島、香川、愛媛）、九州中部（佐賀、長崎）。
- f. 極多——近畿中西部（京都府、大阪府、兵庫県南部）、九州北部（福岡県と大分県、山口県南西部を含む）

なお沖縄県にも侵入が認められているが（初島 1971）、詳細は未調査である。

以上のような現在の分布が今後どのように変化するか、その推移を見守らなければならない。すでに大阪府では防除活動を行っており、兵庫県粟粟郡の安富町や山崎町では有志で侵入防止に努めている。その他にも本種の防除を行なっているところがあり、このような防除対策と本種の繁殖力との相対的な関係によって増減いずれの方向をたどるかが決定されるであろう。

摘 要

近年、日本において分布が急速にひろがっているセイタカアワダチソウ (*Solidago altissima* L.) の生育地と分布の状態について調査を行なった。

1971 年に 全国各都道府県の 雑草研究者に 調査表を配布し、セイタカアワダチソウが分布している都市名、生育地および群落の状態、侵入年度などの調査を依頼するとともに、1971 年～1973 年の間に筆者ら自身で各地の鉄道 および 道路の沿線の分布の状態を調査した。

セイタカアワダチソウが多く侵入し、群落が形成されやすい土地は河川の堤防、鉄道線路ぞい、道路わきであるが、道路わきには大きな群落は少ない。住宅の周辺や河原、工場敷地にも多く侵入しているが、人手が入る程度によって、あるいは川の状態によって群落の大きさが異なっている。用水路ぞい、新規造成地、放棄田、放棄畑では、その土地の条件によって群落形成が抑制される度合いが大きく、侵入していないところも多い。畑の周辺は侵入しているところは多いが、群落形成は進んでいない。林縁や休耕田には侵入しているところは多くなく、群落も小さい。しかし休耕後の年数が短いのに、すでに大きい単一群落となっている休耕田もある。管理作業がよく行なわれる樹園地や普通畑、自然条件が適さない海岸や森林では侵入しているところも少なく、まとまった群落にもなっていない。湛水された水田には侵入していない。

セイタカアワダチソウは近畿以西の平たん地全域に分布しており、北九州や京阪神には本種だけの群落が多い濃密分布地帯がある。東海以東での分布は少なく、茨城県南西部周辺にまとまった分布地帯があるだけである。人間の生活圏の周辺や交通の発達しているところに多く分布しており、標高 200m 以下の土地を対象として、本州・四国・九州の分布図を作製した。しかし標高 400m 以上の土地にも分布が認められており、今後は山間地や北海道などの寒冷地にも侵入する可能性はある。

文 献

- Britton, Nathaniel L. and Brown, H. A., 1913. Illustrated Flora of the Northern United States, Canada and the British Possessions. Vol. III : 380—398. Charles Scribner's Sons. New York.
- 福田一郎. 1971. セイタカアワダチソウとその原生地, 植物と自然 5 (9) : 21—22.
- 初島住彦. 1971. 琉球植物誌, 沖縄生物研究会.
- 北村四郎・村田 源・堀 勝. 1958. 原色日本植物図鑑 (上). 保育社. 大阪.
- 中井 源. 1949. 新移住植物数種. 植物分類地理 14 : 15.
- 大井次三郎. 1972. 日本植物誌, 顕花篇. 至文堂. 東京.
- 長田武正. 1972. 日本帰化植物図鑑. 北隆館. 東京.
- 島野 至・桑野精二・古屋忠彦. 1973. セイタカアワダチソウ (*Solidago altissima*) の繁殖と防除問題について. 九州の雑草 3 : 9—13.